加茂里山通信

平成２６年
秋号

発行　市原商工会議所
加茂里山通信編集部

編集長　　征矢貫造

観音様御開帳の年です

大多喜町から市原市加茂地区の養老川上流の村々に江戸時代から伝わる観音信仰「西国三十三か所御開帳」が、10月12日（日）から18日（土）の一週間展開されました。

12年に2回、午（うま）と丑（うし）年に行われるもので、西国（近畿地方）の霊場から写したとされる一から三十三番までの札所が設置され、訪れた「巡礼」を村人が総出でもてなします。

国本の観音様です

順路
①粟又　②小沢又　③面白　④伊保田　⑤吉沢　⑥平蔵
⑦小田代　⑧大田代　⑨朝生原　⑩小草畑　⑪夕木　⑫戸面　⑬黒川　⑭月崎　⑮田淵　⑯国本　⑰葛藤　⑱板谷
⑲大久保　⑳芋原　㉑根岡　㉒吉敷谷　㉓川崎　㉔柳川
㉕石塚　㉖柿木台　㉗月出　㉘石神　㉙折津　㉚月竹　㉛東飯給　㉜西飯給　㉝徳氏　番外持田崎

三十三観音堂には御詠歌と観音様がまつられています。観音様の指から手綱が結はれ、外に建てられた御柱につながっています。その手綱を握ると観音様のご利益があるといわれています。巡礼の中には町会単位でまとまり、ご詠歌や踊りを奉納される方々もあります。

初日に神奈川県からのお客様と一緒になり話を聞くと、ネットで知り、交通機関を使って来られて養老渓谷駅でレンタサイクルを借り、自転車で回られていました。

「台風が無ければ明日もまわりたかったけど、今日は帰ります。」と残念そうでした。地元の人は親戚のいる町会に出向きお参りします。会場には受け付け係、接待係が待機し御護符を渡します。

石神にて踊りを奉納する石神の皆さん

ふるまわれるご馳走がたっぷり

五番札所となる吉沢の鳳来寺観音堂は国指定重要文化財です。吉沢⑤河内の国藤井寺「まいるより　頼みを書くる藤井寺　花のうてなに　むらさきの雲」国本⑯山城の国清水寺「松風や音羽の滝は清水の　むすぶ心には涼しかるらむ」吉敷谷㉒摂津の国　總持寺「おしなべて　老いも若きも總持寺の　仏の誓い頼まぬはなし」石神㉘丹後の国　成相寺「波の音　松のひびきも成相の　風ふきわたす天の橋立」徳氏㉝美濃の国　谷汲山華厳寺「よろづよの　ねがいをこゝに　納めおく　水は苦より　いずるたにぐみ」

全部載せられなくて申し訳ありません。各札所には当番の方がいて、いろいろ説明してくださいます。子安観音の異名があり、安産のご利益がある、長命寺の観音様に参れば健康長寿間違いなし。とどなたも自分の地域の観音様にまつわる話や姿かたちが一番素晴らしいと熱弁してくださいます。それぞれの地域の誇りと愛着を強く感じることができます。

（大曽根R里山通信員）

吉沢鳳来寺の観音様です

鳳来寺観音堂

奥養老西国三十三札所移観音巡礼

養老川の上流に位置する地区と旧江戸街道に通ずる地区を合わせて三十三か所の霊場札所を設けて、午（うま）と丑（うし）の年に観音様のお開帳が行われます。大多喜町粟又の一番札所から徳氏の三十三番札所まであり、今年は10月12日から18日までお開帳期間となります。2014年（平成26年）の干支は「甲午（きのえうま）」であり、「甲」の字は「奚」（はるか）の意味で植物の内部にできた種子が大きさを計れるまで大きくなった状態を表しているそうです。

持田崎の観音様です

どこを見ても多くの実を付けた柿等がみられる年だと感じられます。

今年は中開帳となる中間の年、私の担当である湯原観音堂で十一面観音菩薩と繋がるように御柱が立てられました。湯原観音堂は天平9年（737年）に創建され、その後災害にあってしまって江戸時代に再建立され、堂宇の天井には蟠龍（地上にとぐろを巻いてまだ天に昇らない龍）が描かれています。近年の改修と観音像の修復がなされ、菩薩像は金色にまばゆい輝きを取り戻しています。

湯原の御開帳式

巡礼ということで、村々の親睦と交流を目的に地元の霊場めぐりが行われます。二十二番札所湯原観音堂（上敷谷）にも、十一番札所夕木の方々の訪問がありました。夕木の方々の踊りは恒例で、来訪を楽しみにしている方も多いと聞いています。このように巡礼をしている時に踊り等の振る舞いに遭遇する事も楽しみの一つになるのではないか思います。富山地区の炭焼き音頭もこのような時に、お披露目という事を考えて頂けないでしょうか。

近隣では、五番札所（吉沢）にある国指定重要文化財の鳳来寺観音堂を訪問しました。茅葺屋根の趣のある建物の中に、十一面千手千眼観世音菩薩が祀られています。道路際で訪問しやすい場所です。そして、お隣の6番札所（平三）は滝谷集会場に安置されている十一面千手千眼観世音菩薩と子安観世音菩薩がありました。ここは会場がお寺ではなく集会場でした。巡礼霊場の施設は青年館であったり、公民館であったりと多彩です。

湯原観音にて踊りを奉納する夕木の皆さん

今回持田崎という巡礼霊場番外地を初めて知りました。地域的には田渕という地区に含まれています。今年初めてのぼり旗を作っており、番外の文字が刻まれていました。観音菩薩は本当に近いところにいらっしゃいました。

初めて奥養老西国三十三札所移観音巡礼を行う方々のために、巡礼地で独自に制作している地図が置かれている地図が置かれている所が多くあります。

（矢代里山通信員）

竹とカヤの「ルーズヴェルトゲーム」

逆転のドラマ

あちこちにあってじゃまと思われているもの、あるいは害とさえ思われているものに竹とカヤがあります。共に生命力や繁殖力が強く、少しぐらい切ってもどんどん増えていってしまいます。今、これらはじゃまもの扱いされ、竹は山の木を駆逐し、ススキは耕作放棄地の代名詞にさえなっています。しかし昔の人は生活の中にこれをうまく活用していました。家を建てるにも身の回りの道具を作るのにも生活の至る所に竹は活用されていました。葦を含めてカヤと称される植物も暮らしと農に必須のものでした。生命力や繁殖力が強いということはほとんどいくらでも再生可能な植物と考えられ、これを資源として活用すればお金が全くかからずこれほど無限に供給できます。

少し前に放送されていたテレビドラマ「ルーズヴェルト・ゲーム」は中堅電子部品メーカーとお荷物のように考えられていた野球部の再生をかけた逆転に次ぐ逆転のドラマで見応えがあり面白い番組でした。今邪魔者扱いされている竹とカヤも害から資源への発想の転換、無から収益への活用など、再生可能なそしてそれが里山の再生へとつなげられるような展開へと持ち込めないだろうか。そんなことを考えます。

竹の話

里山からの発信

加茂地区の至る所で見かける竹はあまりにも当たり前の光景になっていますが、少し外に出て信州などにいってみるとあまり見かけません。実は日本の竹林面積の多い県は関西から中国地方、それにほぼ九州全域の県に集中しているのですが、関西から先では千葉県だけが10傑に入り、全国で7番目に位置しています。それほどに千葉は竹の多い地域です。お陰で毎年タケノコをいくらでも食べることができるのですが、今この竹林が手入れされることなく放置竹林として問題になっています。過去30年で4倍から10倍に竹林は増えているというデータもあります。雪の降った日に道路に倒れ込んでいる竹を見かけたことがあると思いますが、竹の根は浅く土砂崩壊の防止機能の低下を招いています。また大福山から梅が瀬渓谷への降り道の途中でも見かけますが、成長が早く丈も高いので結果的に他の木を枯らし、竹だけの竹林へと変わっていきます。生物の多様性は低下し、日照を遮るので他の植物や昆虫・鳥などの育ちにくい環境になります。これは加茂地区だけでなく、日本全国の竹林の多くが「荒廃竹林」「竹公害」と言われる程に荒れていると言います。これは竹産業の拠点が人件費の安い海外へ移転したことと国内需要が減り手入れも行われなくなったと同時に、手入れをする人間の高齢化が拍車をかけたと考えられます。手入れされない竹林は密集化し竹の根を更に浅くし、表層滑りなどの災害を引き起こすこともあります。

しかしながら、竹そのものに目を向けてみると地上植物の中でも成長の非常に早い持続可能な再生資源とも言えます。その驚異的な成長力をまかなうために有効成分も多く、多くの特性を持つ資源でもあります。竹は3年で生長が完成すると言われますが、タケノコから16～20mの竹になるまで2ケ月です。この間に大量の二酸化炭素を吸収します。竹の特徴は成長の早さばかりではなく、弾力性、抗酸化効果、消臭効果、吸音性能、断熱効果、不伸縮性能など多岐にわたります。

害だと思われたこの竹を全くの逆転の発想で資源と考える。その資源としての竹の活用を考える。竹の活用を収益へと結びつける。そう考えて活動している団体はネットで調べてみるとあちこちにあります。近いところでは長南に「NPO法人　竹もりの里」があります。「里山再生は放置竹林の問題解決が最優先課題」とし、「里山資源を有効活用して、地域の里山再生を目指す」としています。

平成22年からの取り組みでは

- 有償・無償で放置竹林を整備
- 無償で整備した竹林はNPO法人の活動拠点として利用
- 整備した竹林では筍の収穫が可能となり、直売所での販売、筍狩りを実施

間伐竹林の有効活用としては竹を粉にした竹粉を養鶏資料や農業用土壌改良剤として販売。竹を炭にし、竹炭として消臭・浄化用竹炭・農業用土壌改良剤として販売。竹材として竹細工や竹ベンチなどの加工品を作り販売。など、収益に結びつけられます。

実際に竹を粉状にするには粉砕機が必要です。（その粉砕機を使って竹の処理をしている様子は「いちはら里山クラブ」の公式ブログに載っています）粉砕機は小型から大型までであり、大型ではキャタピラの付いた自走式のものがあります。市原市ではこれを町会・環境保全団体・農林業生産団体・その他市民が必要と認めた団体に無償で貸し出しています。粉砕機は小型の20万円台から大型自走式の150万円位まであります。無償で貸し出している市原市の粉砕機は1台です。需要が増して来たらもう少し増やしてもらいたいと思います。

カヤの話

今カヤ葺きの屋根をを見かけることもまれになり、新しく葺き替えたりする作業も全く見なくなりました。ではカヤの需要は全くないかと言ったら逆で、足らない状況だと言います。「現代農業」11月増刊の季刊の特集をしています。茅葺き農家のある地域、文化財の修復などに足りない状況で、今は完全に売り手市場になっているとのことです。一昔前までは集落の共有地にカヤ場があり、個人の持ち山にもカヤ場はありました。屋根を葺くのに必要なカヤは地域の住人が用意できました。しかし、必要とされなくなってからカヤ場はだんだんとなくなり、耕作放棄地などに勝手に生えているような状況に変わって来ています。勝手にどんどん生えて増えていきます。（セイタカアワダチソウと競争のようになっていますが、ずっーと見て来たところ、ススキを打ち負かすようにセイタカアワダチソウが増えたかなと思うと、ある程度の年数が立つとまたススキがそこを占めていると言った具合です。）福井県の小浜市の「森の郷なかなた産物組合では耕作放棄地になっていたたんぼ4haを「カヤ場」とし、カヤを育てています。1束800円から1000円程で、売り上げは120万以上になるそうです。カヤ場に管理の必要性はなく、耕耘もせず、肥料もやらず、冠水も草刈りもせず、年1回刈り取るだけです。1年目に少し手を入れたものの2年目からは見事なススキの草原が出来上がり、黄金色に輝く穂が秋風に揺れる景色を見て地主にも感謝されたくらいと言います。カヤはまた農作物を作るときのマルチとしても活用でき、固くて積み重ねても空気の層を作るので藁よりもいいという評価もあります。

加茂地区でも昔はほとんどが農家の造りの家で、屋根はカヤ葺きそれに囲炉裏があり、そこで煙を出すことでカヤが燻蒸されて防虫・抗菌効果を発揮していました。実に合理的な生活様式でした。この燻蒸したカヤを専門の小屋で作っているある生産組合では一束を3000円で販売しています。

加茂地区でもあちこちで見かける耕作放棄地、そこに手を加えなくてもどんどん増えるカヤ、そのカヤが資源となり、資金を産む産品になる、正に逆転ではないでしょうか。

実の『竹林と耕作放棄地』

竹の生えない地域、耕作放棄地や山野のない地域からしたら、この辺は資源となるものが豊富にある、しかも勝手にどんどん増える本当に恵まれた土地です。あとはそれを活用するかどうか、そこにかかっています。竹とカヤは採算ベースでは合わないかもしれませんが、地域活動をしている団体や組織にとっては十分資金になると思います。竹はそれこそ1年中粉砕することができ、カヤはほとんど手入れの必要のないまま1年に一度刈るだけですから、週末や月に一、二度活動している団体にとっても取り組みやすいのではないでしょうか。

（征矢里山通信員）

加茂地区市民体育祭

10月5日に開催された加茂地区市民体育祭は、台風の影響で加茂公民館の体育館での開催となりました。狭い会場だけに競技の内容も多少変更されましたが、競技に参加する方と応援する方の距離が近いため、一体感があり、熱気あふれる体育祭になりました。

プログラムの最後を飾る地区対抗の綱引きとリレーでは、優勝の行方を決める競技だけに会場のボルテージも上がり、応援の歓声も一層大きく、選手の方にも大きな力を与えたようです。

綱引き、リレーともに富山地区が僅差で1位となり、総合優勝も昨年に引き続き富山地区という結果になりました。

（大曽根1里山通信員）

こつもど紀行

魅力的なカタログ作りから

6次産業などと申します。ご存しのとおり、農業が1次、農産物を加工するのが2次、製品を販売するのが3次産業となりますが、これを合わせたものを称して6次産業となるわけです。

以前、小布施という町に行ったことがありました。栗の産地として江戸の時代から有名なんだそうでありますが、今ではこの栗を使ったケーキ屋さんまであって、多くの観光客でにぎわう町になっています。

地域の産物を加工して販売まですることで、農家も潤い、加工する人たちも販売する人たちも儲かる。儲かれば雇用も生まれ、街ににぎわいが生まれるという「好循環」が出来上がります。小布施の人が言っていました。「6次産業は1＋2＋3でも6ですが小布施では掛け算だと考えています。1×2×3で6。どれか一つでもゼロになれば全部がゼロになってしまう。そんな取り組みをしているんです」なかなかうまいことを云うものだと感心した次第です。

そんなことから、いろんな地域が6次産業の振興を目指して様々な取り組みを行っています。国際芸術祭の先輩である新潟県の十日町市では　地場の産物だけをそろえたギフトカタログを作っています。結婚式や式典などの引き出物に使われるカタログです。観光のPR記事も載せた地場物産だけで作られたカタログは実によくできています。

十日町市の名物はへぎそばと来と日本酒くらいかと思っていたら、野菜のセットやらトマトジュース、ニンジンジュースなど種類も豊富で、なかには農業体験まで商品にしているのには驚かされました。きっとこのカタログに載せるために、商品開発のアイデアを絞り出したのだろうと想像してしまいます。市原だって作ろうと思えばカタログができないはずはないのであります。売り先はいろいろあります。たとえば工場や企業の皆さんにお願いして、お中元お歳暮に使ってもらうとか、ゴルフコンペの賞品にいかがとか、当然、冠婚葬祭には地元の産品をなんてお願いすれば、そこそこ流通しそうな気がします。

カタログに載せる商品は何にするかが問題ですが　それだって商工会議所や農協さんにお願いすれば、知恵の詰まった魅力的な商品が揃うはずです。

今春のアートミックスではなかなか地元にお金が落ちる仕組みを作りきれませんでした。売れる商品づくりと、売り方が間に合わなかったのが大きな要因です。でもこうしたカタログ作りがきっかけになって、次の開催には地元が少しでも潤うような結果が欲しいと思うのであります。

（大曽根R里山通信員）

花プロジェクト2014

今年も種をまきました

9月27日の土曜日に、恒例となった「花プロジェクト」が開催されました。上総川間駅から板ケ谷崎付近まで各種地域団体と沿線の学校の生徒たち、そして先生や親達も参加して、来年春の満開の菜の花を願いながら種をまきました。高滝駅には本郷沿線に種をまくために参加した「菜の花プレイヤーズ」が50人近く降りて現場に向かいました。その中には知った顔が何人もいました。香川県からこのためにやって来たというあの内海さんもいました。種まきの後は缶バッジをつけて養老渓谷駅へ向かいます。楽しみなカレーのもてなしが待っています。700人分以上のカレーを作ったということですから、時間をかけてカレー作りをした方たちのがんばりに感謝です。

（征矢里山通信員）

昭和村文化祭

日時　平成26年11月1日（土）
　　9：00～14：30
会場　市原市万田野732番地6
　　社会福祉法人　昭和村
内容　五月流千都契会舞踊発表会
　　加茂学園墓部発表会
　　加茂地区保育園　加茂学園児童、生徒の作品展示
　　フリーマーケット、バザー等

高滝小の応援歌

富山小学校の運動会の応援歌が懐かしい。

小中一貫校となった今では歌われる事が無い応援歌。里見小学校、白鳥小学校、月出小学校、高滝小学校共々歌い継がれてきたであろう。

同窓会をしても、校歌は覚えている。少なくとも月に一度は歌っていた為だと思う。しかし、応援歌はメロディー、歌詞と覚えている人は数少ない。

活字に残される事の少ない応援歌を探索してみたくなった。アルバムにも石碑にもない。今まで加茂地区の市民体育祭でも歌われていなかった。何処かで歌いつがれていくように、応援歌探索をしてみようと思う。

第一弾として、高滝小学校の応援歌。

（矢代里山通信員）

紅

一　正気堂々空覆い　風雲怒る鹿島台
　震天動地の雄哮に　立ちし選手のいき見よや

二　流れも清き養老の　尽きぬ泉の努力もて
　勝ち得し今日の喜びに　胸こそ若き身は

三　戦い勝ちぬ我勝ちぬ　嗚呼讃えずやわが友よ
　栄えある歴史創りゆく　わが部の誉輝かせ

白

一　碧高く堂々と　集う我等若人の
　胸に輝く桑葉に　我等が選手の意気を見よ

二　瑞雲靡く松尾山　その神霊の加護受けて
　いまこそ映ゆれ高滝の　吾等が選手の意気を見よ

三　加茂の流れに育まれ　功は高し高滝の
　練磨の力いまぞ知る　われらが選手の意気を見よ

おやつの時間

いきなり団子

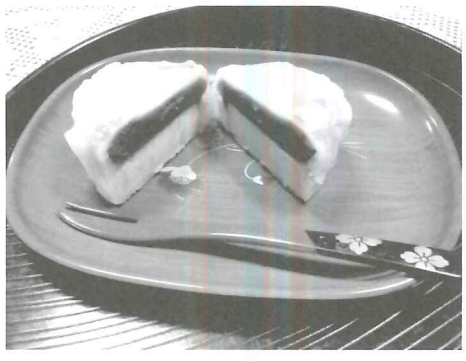
材料

さつま芋	200g
薄力粉	100g
米粉	100g
砂糖	30g
塩	小さじ1/2
サラダ油	大さじ1/2
ぬるま湯	70～80cc
つぶあん	350g

作り方

①さつま芋は皮をよく洗い、1cmの幅に切り水にさらす。
②粉類は合わせてふるっておく。
③ボールに粉類を入れ、砂糖、塩、サラダ油を入れる。
④ぬるま湯を少しずつ加え、生地をこねる。30分休ませる。
⑤さつま芋をザルにあげ、水気をとる。
⑥さつま芋の上につぶあんを大さじ1ずつ置く。
⑦生地をピンポン玉大に丸め、薄くのばし⑥を包む。
⑧クッキングペーパーを5cm角に切り⑦を乗せる。
⑨沸騰している蒸し器で約20分蒸す。
＊蒸し上がり、すぐに食べない分は一つずつラップで包む。（冷凍可）食べるときにはレンジで30秒加熱する。

※熊本県の郷土料理です。お芋とあんこを皮に包んでいきなり蒸します。寒い日に熱々の『いきなり団子』美味しいですよ！



（大曽根R里山通信員）

人と環境が一体となって大切な未来へ
自然環境と人間との調和を目指して
杉田建材株式会社
本　社　市原市万田野 26　TEL 0436(96)1311
市原支店　市原市惣社1－1－22　TEL 0436(24)0511
南総支店　市原市牛久450－1　TEL 0436(50)0111
URL http://www.sugita-group.com/

キムチチゲや石焼ビビンバをはじめ
韓国家庭料理が評判！
美味しい料理とお酒でカラオケ三昧
居酒屋
大ちゃん 2
（株）音楽プロデュース NO MOSS
TEL090－2629－9600

高滝の歌が誕生！
11月12日
日本クラウンより　安西　豊
高滝慕情／星のソナタ　発売

宝林寺　四五〇年祭開催される

養老渓谷　朝生原にある里見家ゆかりの寺、曹洞宗　冨士山　宝林寺の『開闢450年祭』が行われました。南総里見八犬伝「伏姫」のモデル「種姫」をご存知ですか？

戦国時代の房総の雄、里見義堯公（館山城主、後に久留里城主）の長女、里見種姫は、大多喜城主正木甲太膳亮時茂の長男、正木大太郎に嫁した。永禄七年一月、大太郎は第二次国府台合戦（義堯の子、義弘が相模の北条氏兼・氏政に敗戦）で戦死。時に二十五歳。種姫は二十二歳。悲しみのあまり姫は尼僧となり、その後当地に至り尼住居（尼建前）を皇庵、安房日浜に種林寺を創建し（現在は廃寺）、再び宝林寺にて生涯を送る。

すなわち永禄七年八月、朝生原の字坊山に七堂伽藍を備えた宝林寺を開基し、亡夫の冥福を祈ったという。天正十七年六月十五日、種姫四十八歳で病死。戒名は、「宝林寺殿慶州妙安大禅定尼」として、位牌が現存する。このように当山は、里見種姫の悲しみを秘めた歴史ある名刹である。時は経て平成の世を迎え、当山住職第二十四世、千葉大慈和尚を中心に檀信徒は、一致協力し合い四百余年の法燈を伝えている。～曹洞宗　冨士山　宝林寺史～より

十月五日（日）あいにくの雨にもかかわらず、里見香華さんほか里見会ご一行、檀信徒の皆さん、総勢二百五十人が集まり、先祖代供養から始まりました。住職挨拶の中では、里見種姫の願いは『敵味方無く、平和な世が迎えられることを祈る』ことであり、四五〇年の感謝とともに五〇〇年祭、平和への誓いを話されました。里見家当主・里見香華さんの挨拶では、先祖供養の感謝を述べられ、里見一族のドラマを是非大河ドラマにしたいと作家さんの紹介もありました。挨拶に続いて里見会の皆さんによる「里見の剣」、「里見節」、モンゴル人音楽家、アマルジャルガルさんの「馬頭琴コンサート」、地元有志による演舞、カラオケが続き盛大に四五〇年祭が執り行われました。

（大曽根R里山通信員）

魚屋の戯言

醤油のある幸せ

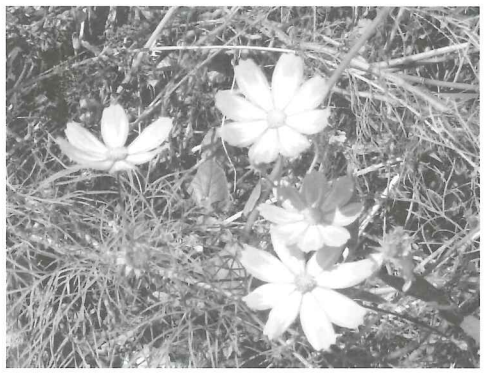
しばらく外国に滞在していて日本に帰ってきた人の中には「日本の空港に降り立つと醤油の匂いを感じる」と言う方がいらっしゃいます。それも飲食店の近くだけではなく、空気全体から醤油の匂いを感じるというのです。気のせいと言えば気のせいなのかもしれませんが、それほど日本と醤油の関係が深いことを物語っているように思えるのです。醤油は日本を代表する調味料と言ってもいいでしょう。アジアの国々にも同じような発酵液体調味料を醤油と呼ぶ国もありますが、原料や塩分、あるいは含まれる油分等が異なるために風味も微妙に違うようですし、日本国内で流通している醤油でさえも地方によってそれぞれに特徴があります。醤油の起源には多くの説があってどれが正しいのかはっきり分かっていません。その中でもいくつかの説で共通しているのは味噌を作る時の副産物が醤油になったと言われている事で、江戸時代の日本語－ポルトガル語の辞書には「醤油　味噌から取る非常においしい液体で食物の調理に用いられるもの」との記述があります。

醤油の原型と言われるたまり醤油、関西圏で多く使われるうすくち醤油、千葉を含む関東圏で愛用されるこいくち醤油、主に九州で消費される糖分を含んだ醤油、最近では卵かけご飯専用のものが製品化されるなど、原料や製法によって多くの種類があります。私が醤油と聞いて真っ先に思いつくのはなんと言っても刺し身です。魚屋になってしばらく経った頃、醤油がなかった時代はどうやって刺し身を食べていたのか知りたくなって調べてみた事があります。日本酒を火にかけてアルコール分を飛ばしたものに塩と酢を入れた液体をつけて食べていたという記述にたどり着いた時は、醤油に比べてずいぶん味気なかったんだろうなの思いがしました。刺し身に限らず、もし醤油が発明されていなかったら私たちの食事はずいぶん違ったものになっていたはずです。煮物ひとつ取っても醤油なしの味付けなど想像したくもありません。うなぎだって白焼きよりも蒲焼きの方が好きですし、ヨーロッパやアメリカでは肉を焼くのも塩と胡椒だけだそうですが、私は醤油の方が断然美味しいと思ってます。醤油をそのまま使うだけでなく、ぽん酢醤油や焼肉のたれ、めんつゆ、更にはドレッシングなどまで考えれば、もはや醤油のない食卓など考えられません。

こんなに香味豊かな醤油を伝えてくれた先人に感謝しつつ、今夜も鮪の刺し身で一日を締めくくろうと企んでいる秋の夕方です。

（鈴木里山通信員）

編集後記



・前号（夏号）の舞の海氏の講演の記事の中の、高滝神社を背景に双葉山と地域の関係者が収まった写真のことについて、平野の石渡さんから情報をいただきました。今の消防の加茂分署のところが原っぱだったころ、そこで相撲興業が行われたそうです。いわゆる巡業のような形で終戦までに2度も行われたそうです。そこに双葉山もいて高滝神社を詣でてみんなで写真に納まったわけです。有力な興行師（山師）がいて呼ぶことができたという事でしたが、2度もあった相撲興業を全く知らなかった高滝地区のお年寄りもいました。浪曲師の二葉貞子がまだ若いころ、飯給に来て泊っていったという話も聞いたことがあります。他にも埋もれた話があるかもしれません。

・毎年残念なことに高滝神社の例大祭の直前に編集を仕上げなければならないので、加茂のお祭りをお伝えすることができません。昨年は雨で中止となりましたが、今年は日本晴れのもとで開催されるのではないかと今（18日）思っています。

・朝晩冷え込むようになってきました。桜の木も葉をずいぶん落としています。すすきの穂が立っています。まだ紅葉は始まりませんが柿の葉は見事に色付いています。柚子の実も山吹色に近づきつつあります。加茂の里山の秋の深まりと共に、一年の経つことのなんと早いことかと思い知らされます。

（征矢里山通信員）

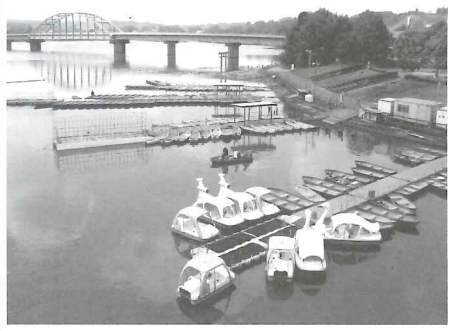
情報提供・取材依頼はお近くの通信員へ
メールでも受け付けます。
紙面及び記事に関する意見・お問い合わせは左記へ
市原商工会議所
0436（22）4305　担当　河崎まで
Eメール　kawasaki@i-cci.or.jp

次回は1月25日発行予定です。

房総・養老渓谷の
地酒お土産は

養老渓谷駅前
角屋商店
養老渓谷観光協会窓口
市原市朝生原１８１
TEL０４３６－９６－１１０８
FAX０４３６－９６－００５２

愛車のある幸せな暮らし
応援します！
安全・安心
有限会社　全日本ロータスクラブ加盟店
小茶自動車
市原市石神２２７
TEL０４３６－９６－０４８２
FAX０４３６－９６－１２９３

皆様と共に歩む観光

バス釣り最盛期！
高滝湖観光企業組合
TEL　0436-98-1277

加茂里山通信

平成27年 新年号

発行　市原商工会議所
加茂里山通信編集部

編集長　征矢貫造

里山の魅力を発信！

自然養鶏農場 つねいずみファーム

富山地区の吉沢入口にある卵直売所つねいづみファーム。駐車場に入るやいなや元気な鶏の鳴き声の洗礼を受ける。自然養鶏農場として、直売所の裏側にニワトリが種類ごとに飼育されていた。種類としては、烏骨鶏、黒鳥、アローカナと1000羽程が外敵からしっかりと守られた状態でのびのびと歩き回っている。農産物と卵直売所の中では、ご主人と奥様が2人で切り盛りしていた。当初から気になっていた女性に人気の美容と健康に良いと言われている青い卵のアローカナと烏骨鶏と黒鳥の卵は、産卵率が本当に低く、普通の鶏が1年間365日×80％と考えると、半分ほどの産卵率になってしまい、希少価値の高い卵だと感じられた。その卵がパックとなって、いろいろな食材とともに販売されている。卵以外の食材は、地元の方々との連携で野菜類や漬物、山で採れた自然薯等々もあった。ゴルフ帰りのお客さんの中にも大勢リピーターがいるようで、黒にんにくが気に入ったのでまた買いに来たというお客さんに遭遇。多くの野菜を購入するのも、料理方法を販売所の奥様に聞くのも楽しそうだった。

鶏はこの販売所の裏手に

直売所の中からも鶏小屋を見ることができたが、相当警戒心が強いので、近づいて写真を撮る事が難しいと聞いていた。ご主人に頼み消毒を施し、逃げ出すギリギリまで近づいた。子供の頃の鶏を追い回した時の記憶が蘇る。捕まえる事が出来るはずもないのに、ゆっくりと近づいていくと一瞬こちらを見て、バタバタと逃げていく。40年前は、放し飼いだったなと今になって思う。

ご主人の今気がかりなことは、農作物の生産者の高齢化が進み、次なる担い手がいないことだという。農産物も100％富山地区の生産品とはいかず、他の地域の方々の品もある。商売をする人がメッキリ減ってしまった富山地区。圏央道が出来て便利になった分期待が大きくなっていく。目の離せない直売所となっていく事は間違いないだろう。

（矢代里山通信員）

鶏たちのほんの一部

第41回市原高滝湖マラソン 新春に駆ける！

全く雲のない最高の天気の下、第41回市原高滝湖マラソンが開催されました。2400人余りが新春の高滝湖周辺を駆け抜けました。トップを競う者、自分の記録更新に挑む者、参加して走ることを楽しむ者、参加の仕方はいろいろの様ですが、ゴールを超えたところで見ることのできる、上気した顔に宿る達成感のような表情がそれぞれの参加の意義を語っているようでした。

この大会に限ったことではないでしょうが、大会に参加する人以上に目につくのは競技関係者です。駐車場の案内をする者、コースに立つ者、救護に備える者、記録に関わる者、警備に関わる者、選手や見学者に無料で椎茸スープや甘酒を配るために早くからスタンバイする者、もちろん号砲を鳴らす人まで、実にたくさんの人が関わり、このマラソン大会が成り立っていることが周辺を歩いてみるとわかります。駐車場は加茂中学校にまで用意され、そこにも詰めている人もいました。そして高滝駅では普段ではとても考えられないようなたくさんの人が降り、臨時の駅員数名と臨時の改札口、それに小湊鉄道のグッズ販売まで行っていたり、さらに着ぐるみの「ケロちゃん」まで登場。小学校の校庭もラーメンから串豚焼きや、大判焼きなどの飲食を扱う出店から野菜の産直があったりしてにぎやかです。これも毎年の光景ですが、今年も大会の盛り上げに一役買っていました。

やはりゴールは格別！

愛嬌ふりまくケロちゃん

（征矢里山通信員）

加茂の初夢

加茂芸術村プロジェクト 3

昨年の「いちはらアートミックス」はいくつもの課題を残しました。訪れる人が少なかったというのはその中でも大きな課題で、宣伝、広報、受け入れの姿勢、全体をプロデュースする人間の不在、など様々な要因が考えられますが、油断はなかったかと思っています。越後妻有の大地の芸術祭や瀬戸内の国際芸術祭に比べ、首都圏からのアクセスの良さという点で、東京からこれだけ近いのだから人はいっぱい来るだろう、という一種の楽観がなかったか。まだ始まる前に、関係者の何人かが「新潟の奥の方にあれだけ人が行くのであれば、都心からすぐの市原の芸術祭には黙っていてもたくさんの人が来るだろう。20万と言っているけど、下手すりゃ100万くらい来るんじゃないか」という趣旨のことを言っていたのを覚えています。恐らくはそういう楽観は結構の人が持っていたのではないかと思えます。結果はともあれアートミックスが開催され、色々な芸術家がやってきて地元の人間と関わり、あるいは参加を促し、そこに付き合いが生まれました。準備段階からサポーターとして参加して、何に使われるのかどんな風になるのかも想像できない中で、蔓を集めたり、プールのヘドロをかき出したり、竹や木を伐採した人もいます。生まれて初めて芋居に参加した人もいました。見るに見かねて本気になって世話を焼いた人も何人か知っています。あの期間、この地域は一種の芸術村になっていた気がします。もちろん中には快く思わない人や、全くの無関心な人がいたのも事実です。しかし、2014年の春に加茂地区を中心にして国際的な芸術祭が行われたという事実は、なんらかの形で参加した・しないに関わらず、記憶としてこの地域の人に刻まれました。

前回の初夢『芸術村プロジェクト 2』で、若く才能のある作家たちの発表の場として、廃校になった学校などを提供してはどうか書きました。また、発表の場を提供することで、都心から人を呼ぶようにしたらとも書きました。考えは全く変わっていません。発表の場は学校跡地だけとは限らないでしょう。冬場使わないたんぼや耕作放棄地など、その気になれば個人的にも提供可能でしょう。芸術作品は美術館で見るものだという既成概念を見事に覆してみせたのは先のアートミックスの大きな成果と考えます。どこでも発表の場になるということを自分たちの目の前で示してくれた芸術祭でした。湖畔美術館もこれまでになかった色々な企画を進行させています。美術館を一つの核として加茂地区全体で色々な企画展を常設していったら、この地域のことに関心のなかった人たちにも徐々に認識していってもらえるのじゃないか、そう考えます。

宮部みゆきの「小説写真館」の表紙の飯給駅の写真が桜の咲く頃に多くのカメラマンを呼び、市原高滝湖マラソンには遠く県外からも人がやってくる。紅葉や新緑の時期のハイキングにも多くの人が参加する。田んぼアートの案山子（かかし）のコンテストを実施して多くの人を集めている地域もあります。奈良県明日香村、熊本県玉名、高知県土佐山田町、長野県飯田市千代など。明日香村は彼岸花も多く植えられ案山子を訪ね歩くようになっています。

そういうことも含め、場所を提供するなり自分たちで企画するなりして少しづつやっていったら、いつかはそれが大きく育つ可能性があります。どんどん過疎化が進んでいる加茂地区に多くの人を呼び込むための工夫が必要です。加茂芸術村プロジェクトは夢ではなくなるかもしれません。

（征矢里山通信員）

初夢の炭焼

あちらこちらで白い煙が上がっている。炭焼き小屋が再生されている。管理するのが難しい竹林をどうしたらいいものかと思案した結果だった。年配の方が多いこの土地では、また炭焼きの経験をしたことのある諸先輩が多い。土壁と耐火煉瓦を使ったしっかりした炭焼きやドラム缶等を使ったちょっと近代的な炭焼き、土手に穴を掘って作った炭焼きといろいろな手法を模索している。ソーラーパネルだけだという近代化の波に逆行して、昔ながらのエネルギーを使って生活してみたくなった。囲炉裏端を庭に造り、持ち寄った材料で酒盛りをする。寄り合っては、自分が作った物を披露して意見を聞く。本炭検査員という方がいらっしゃったというを聞いたが、今ではどうしているのだろうか？それほど炭焼きという職が多かったのだろうか。今も都市ガスではなく、プロパンガスを使用している地域なだけに気になる職業になっている。この季節の暖を取る方法の見直しとしては、田舎ならではのことかもしれない。炭化したものをアートとするために、いろいろな趣向を凝らし、先陣の知恵者達の話を聞くのもたのしい。

（矢代里山通信員）